

No.49 ウスマン・ソウ 「倒れた人」

Ousmane Sow

北川フラムさんのコラム / 1995 (平成7) 年 11 月 15 日付 立川市市報記事より

ウスマン・ソウの作品は、2人のヌバ族の像で、ファーレ立川内では一番リアルな姿で設置されている。ソウはやがて消えていくヌバ族というアフリカの部族の姿を、世界中に残していつている。国の重要性が国民総生産によって測られるのであれば、アフリカは自分の運命を自分で決めることさえ禁じられてしまうだろう、と彼は考える。

しかし、精神という助けがあれば、どんなところにも出会いがある。それを知るために対話を築こうとしたのがファーレ立川で、この街の成功は、他の街とは反対に、人とアートが混在することを、街ができることより先に望んだからではないか、と彼は考えている。たしかにアートは人と人をつなぐ大切なものだと思う。

作家のメッセージ / 日本住宅公団 (現: UR 都市機構) 「ミニ通信」より

北川さんと彼のチームと一緒に立川を訪れた時のこと、私の彫刻が占めることになるその場所で、北川さんは私に、他の日本人作家、世界の作家と共に街の文化的営為に参加してほしいと言われました。

私のことを考えてくださったこのプロジェクトの推進者の方々に感謝するとともに、私は強い不安にかられました。ここでこれから行われることの重要性が良く分かっていたからです。ホテルについて結局、“棒を持ち、腕を組み合い、体をぶつけあって闘った後の闘技の終わり、倒れた人”によって、ヌバ・シリーズを完結させるのが妥当なことだと思い至りました。

したがってヌバ・シリーズの締め括りである闘技の結末は立川にあることとなります。

2人の闘技者は、2年前より東京にある“短い髪の踊り子”というタイトルの姉妹作に近く、またニューヨークにある“化粧の時間”、フランスのトロア美術館にある“横たわる闘技者”、セネガルのダカールにある“棒を持って立っている闘技者”とほぼ同様のものとなります。

私は日本や世界のアーティストと共に働ける喜びに加え、文化や平和的活動が、かつて軍事的であった場所に初めて足跡を記したという事に、このプロジェクトへの限りない共感を覚えます。